

現場スタッフの選択機会行動の提案の変化  
—行動的 QOL を考え方の枠組みとして捉えて—

立命館大学  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
原田 有規

序論 行動分析学の視点から、行動的 QOL という考え方が提唱されている。先行研究では、行動的 QOL が障害を持つ個人の生活状態の向上に有用であることが明らかにされている。しかし、行動的 QOL が支援者にとってどのような変化をもたらすかは明らかにされていない。そこで本研究では、行動的 QOL を新たな支援のアイデアを生み出す枠組みとして捉えた。

目的 支援の現場で働いている職員に対して、行動的 QOL を提供したときに、その職員からどのような支援の提案が出てくるのかを検討した。

方法 本研究の参加者は、若者支援を行う事業に参加するスタッフ 4 名であった。実験者はミーティング時に挙げられた参加者からの提案数を記録した。独立変数は、「振り返りシート」と「行動的 QOL の教示」の 2 つであった。従属変数は、ミーティング場面で挙げられた①次回の活動に向けての提案数と②行動的 QOL に当てはまる提案数であった。最初に、ミーティング場面に振り返りシートを導入した。次に、行動的 QOL の教示を各参加者に行った。

結果・考察 本研究の結果から、振り返りシートの導入が、提案数を増加させた。また、行動的 QOL の教示が、行動的 QOL に当てはまる提案数を増加させた。以上の結果より、行動的 QOL の学習によって、提案内容の質的な変化があることが示された。これは行動的 QOL が新たな支援のアイデアを生み出す枠組みとして機能したと考えられる。